

現代日本若年女性の「生きづらさ」のもう一つの要因

－「過剰自己実現欲求」仮説－

桜井 芳生

1. 緒言

ひところほど言及されなくなったかもしれないが、日本現代若者の語るさいのキーワードは、「生きづらさ」である（あった）。このキーワードで、インターネット検索をしてみると、おもに、心理的な原因をのべるもの、失われた〇〇年・格差社会など、社会経済的要因を原因とするもの、その絡み合いを原因とするもの、に大別できるように、おもわれる。筆者は、これらが「生きづらさ」の原因であることを全く否定しない。

しかし、もう一つ看過できない原因があることを指摘し、今後の探求・議論に資したいとかがえる。

尾上の紹介によるいわゆる進化論的人間認識によると、近代家族に特有とおもわれてきたかもしれない性役割分業の存在は人類史の多くに否定しがたい、と思われる。もちろん、全部を全く同様にそうだったとか、変差がなかったとか、いうわけでない。また、事実がたとえそうであっても、その事実だけからして、現在も未来もそう「あるべきである」といった自然主義的誤謬を主張したいわけではない。

しかし、事実認識についての仮説として、女性にとっての育児についての信念・態度が、彼女の他の信念・態度・行動と関連していることは、ありうるかもしれない。

2. 方法と対象

2014年12月～2015年1月に、南九州のある国立大学法人の学生たちによって、周囲の学生を中心とする知人たちを対象にして、回答者にまた回答者を紹介してもらうという多段階スノーボール方式で、非無作為抽出によるアンケート調査をおこなった。依頼数270人、回収数229人。回収率84.8%であった。

3. 結果

本稿では、主に女性のみ分析する。女性の年齢の記述統計量は以下のとおりであった。

年齢

度数	有効	150
	欠損値	1
平均値		20.11
中央値		20.00
最頻値		19
標準偏差		2.477
最小値		18
最大値		45

(図表1. 年齢)

本稿でキーとなる設問は以下である。

あなたは生きづらさを感じることはありますか

6. かなり、そう。 5. まあ、そう。 4. どちらかという、そう。 3. どちらかいうと、そうでない。 2. まあ、そうでない。 1. まったく、そうでない。

その設問の回答（変数）の記述等計量と分布をみてみよう。（女性のみ）

「生きづらさ」

度数	有効	151
	欠損値	0
平均値		3.90
中央値		4.00
最頻値		3
標準偏差		1.290
最小値		1
最大値		6

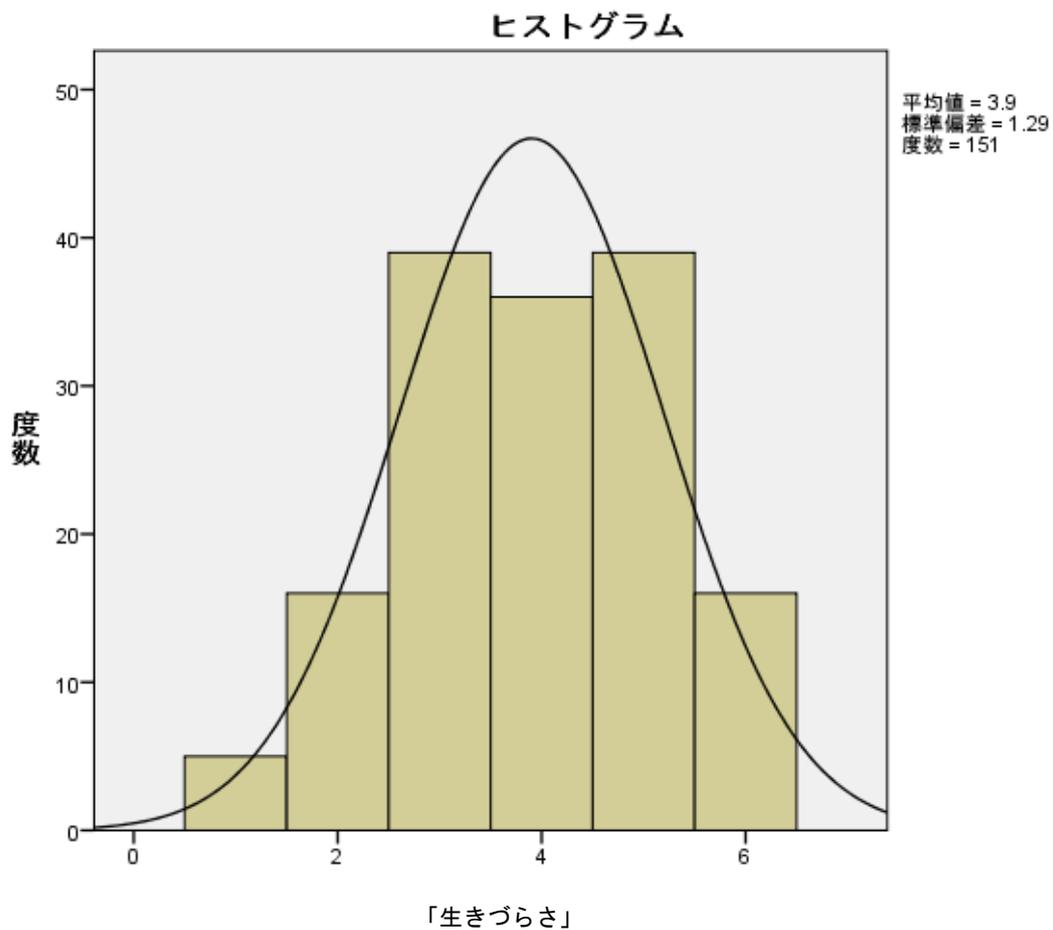
(図表2. 「生きづらさ」記述統計量)

「生きづらさ」

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
--	----	-------	---------	---------

有効	1	5	3.3	3.3	3.3
	2	16	10.6	10.6	13.9
	3	39	25.8	25.8	39.7
	4	36	23.8	23.8	63.6
	5	39	25.8	25.8	89.4
	6	16	10.6	10.6	100.0
	合計	151	100.0	100.0	

(図表3. 「生きづらさ」度数分布)



(図表4. 「生きづらさ」ヒストグラム)

上に示したとおり「6. かなり、そう。」「4. どちらかという、そう。」という値のふりかたより、けっこう多くの女性が生きづらさを感じるがあると見て取れよう。

本稿では基本的に男性の分析結果はしめさないが（女性と同様のパターンがとくにみいだせ

なかったので)、記述統計量と度数分布は参考に示してみよう(以下、男性のみ)。

「生きづらさ」

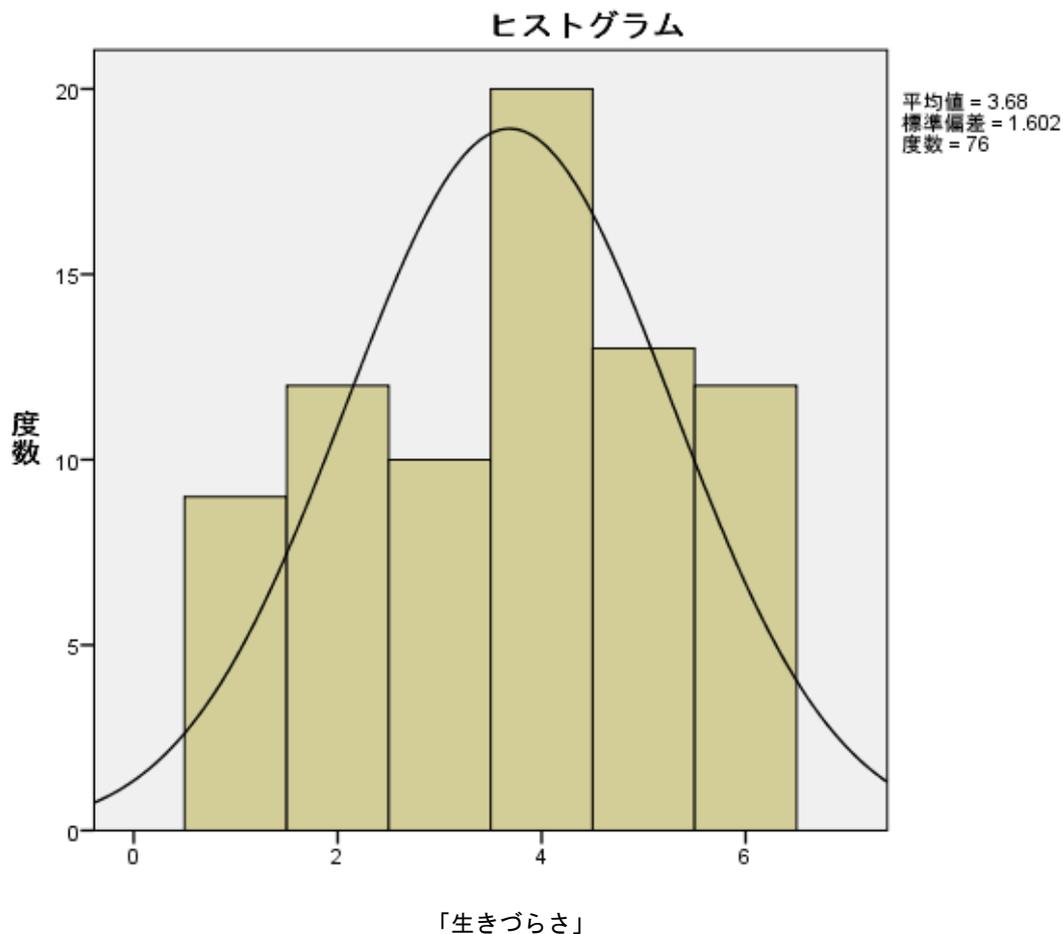
度数	有効	76
	欠損値	0
平均値		3.68
中央値		4.00
最頻値		4
標準偏差		1.602
最小値		1
最大値		6

(図表5. 「生きづらさ:男」記述統計量)

「生きづらさ」

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	9	11.8	11.8	11.8
	2	12	15.8	15.8	27.6
	3	10	13.2	13.2	40.8
	4	20	26.3	26.3	67.1
	5	13	17.1	17.1	84.2
	6	12	15.8	15.8	100.0
	合計	76	100.0	100.0	

(図表6. 「生きづらさ:男」度数分布)



(図表7. 「生きづらさ:男」ヒストグラム)

度数分布については、女性でも男性でも同様な傾向があるといえそうだ。

さて、では、どのような女性が、「生きづらさ」をかんじやすいのだろうか。

本調査は、大学生の授業の一環として、おこなった、いわゆるオムニバス（相乗りバス）調査であった。いくつかのチームにわかれ、それぞれのチームが検証のかけたい仮説に対応した設問を提起した。さらに、多くに仮説の独立変数あるいは統制変数となりうるように、定番的な社会・経済・生理的変数をフェースシート項目とした。そのため、以下分析する変数としては、本稿の問題意識からすると含意が理解しがたいものがあるかもしれない。しかし、探索的分析としては、むしろ、そのような変数から、予想もつかない・見通し・仮説がえられることが少なくない。

なお、以下登場する「神経質傾向」「（異質な経験への）開放性」とは、人格心理学にお

いて現在大きく支持されつつあるいわゆる「ビッグ5」仮説にもとづくものである。本調査では、ネトルによる「ニューカッスル・パーソナリティ評価尺度表」の翻訳版を利用し、上記二つは、5つの「次元」のうちの二つのスコアである。

というわけで、まずは、しらみつぶしに、上記「あなたは生きづらさを感じることはありませんか」の設問（変数）（以下、「生きづらさ」と表記）と有意な相関をしめした変数をピックアップした。

そしてその後、どのような変数（群）が、（線形性を仮定して）どのような大きさ・正負で影響をあたえているかをみるため、「生きづらさ」を従属変数、上記の有意な相関をしめす諸変数を独立変数とする、線形重回帰分析をおこなった。

モデル選択においては、統計ソフト SPSS における「変数減少法」（註。参照）を利用した。

上述の線形重回帰分析変数減少法の結果は、以下のとおりである。

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	1.651	.826		1.998	.048
	読書好き異性好き	.079	.086	.068	.927	.356
	インドア派	.081	.070	.092	1.152	.251
	中学明るい	-.297	.115	-.277	-2.575	.011
	中学人気	.222	.118	.207	1.884	.062
	高校明るい	-.094	.104	-.084	-.912	.363
	漫画描く	.105	.071	.125	1.480	.141
	声優知識	-.071	.067	-.090	-1.067	.288
	作法	.176	.107	.122	1.653	.101
	外向性	-.027	.053	-.045	-.514	.608
	神経質傾向	.174	.040	.312	4.348	.000
	誠実性	.042	.049	.060	.866	.388
	開放性	.100	.037	.226	2.723	.007
	子育てで	-.129	.064	-.145	-2.012	.046
~中略~						

10	(定数)	2.411	.594		4.059	.000
	中学明るい	-.183	.075	-.171	-2.454	.015
	神経質傾向	.197	.039	.353	5.082	.000
	(異質な経験への)開放性	.130	.030	.295	4.292	.000
	子育てで	-.143	.060	-.160	-2.369	.019

従属変数「生きづらさ」

(図表8. 重回帰分析結果)

モデル要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.626	.392	.333	1.057
~中略~				
10	.584	.341	.323	1.065

(図表9. モデル要約)

以上のように、最終的には、4つの独立変数による第10モデルが選択され、そこでの各独立変数はすべて、5%有意であった。また、調整済みR2乗値の値より、この最終モデルは、従属変数の分散の32.3%を説明していると解釈できる(第1モデルからの説明力の減少は、1.0%でしかない)。

最終第10モデルの独立変数を述べよう。

「中学明るい」：標準偏回帰係数=-.171

設問ならびに選択肢の全文は以下の通りであった

あなたは中学生のとき、明るい方でしたか、それとも暗い方でしたか？

6. まったく明るい方。 5. まあ、明るい方。 4. どちらかというと、明るい方。
3. どちらかというと、暗い方。 2. まあ、暗い方。 1. まったく暗い方。

で、あった。

「神経質傾向」：標準偏回帰係数=.353

「(異質な経験への)開放性」：標準偏回帰係数=.295

以上ふたつは、単一の設問によるものでなく、いわゆる合成変数である。いわゆるビッグ5(上述)といわれるもののうちの一つである。

第四、最後の独立変数は：

「子育てで」：標準偏回帰係数=-.160

設問ならびに選択肢の全文は以下の通りであった

将来、子育てに生きがいを感じられれば、必ずしも仕事や趣味で生きがいを感じられなくてもいいと思いますか

6. かなり、そう。 5. まあ、そう。 4. どちらかというと、そう。 3. どちらかというと、そうでない。 2. まあ、そうでない。 1. まったく、そうでない。

4. 議論

【「生きづらさ」の最後の要因】

以上、社会調査(アンケート調査)ならびにその統計的分析の結果を概観してきた。現代若者(本稿は女性のみだが)の「生きづらさ」の原因(要因)を探索するうえで、すこしく興味深い結果があらわれたとかがえる。

まず、いわゆる本人の経済的状況の、本人の「生きづらさ」に影響は、確認できなかった。

しかし、これは、本調査のサンプリングの事情が大きききいていたのかと、思料される。本調査における回答はすべて、大学生である。いわゆる「正規就業/非正規就業」にかん

する要因はそもそもあまり影響しないポピュレーションといえよう。すなわち、本調査は、「いきづらさ」の要因に若者の就業形態・経済形態が影響しているという類の仮説をとくに反証しているものではないといえよう。

第二に注目されるのが、最終モデルにおいてのこった「4つの独立変数」のうちの第一から第三のものまでであろう。

定性的に言えば、「中学生のとき、暗い方」であるほど、「神経質傾向」がつよいほど、「開放性」が高いほど、「いきづらさ」を感じるわけである。

「開放性」が、ちょっと誤解をまねく、命名かもしれない。ビッグ5の主唱者ネトルもいっているが、これはいわば、詩人、芸術家肌といってよく、われわれのフィールドでは、オタクっぽいヒト、趣味に深い関心をもつ日本人現代若者が、強い傾向があることがいまままでみてとれた。あるいは文学青年っぽいヒト。

以上3つはいわば、心理的な要因であり、いままで指摘されてきたことと類似方向といえるだろう。

とくに、本調査において、発見的価値があったとおもえるのが、第四の独立変数である。その設問回答肢文言は、述べたとおりであった。

値のふりかたと、ベータの値より、「将来、子育てに生きがいを感じられれば、必ずしも仕事や趣味で生きがいを感じられなくてもいい」

と考えている女性ほど、「生きづらさ」を、感じない、のであった。

線形重回帰分析のロジックより、「中学時代の暗さ」や外向性・開放性といった性格的心理的要因を統制しても、そう、なので、ある。

ベータの絶対値は大して大きくないといえるかもしれないが、当初投入した13個の変数の中の、4個に生き残り、しかも、有意確率は.019と十分に小さい。これは、注目にあたいしよう。というか、無視はしがたい現象ではないだろうか。

寡聞にして、このような「育児で終わってもイイ」意識と「生きづらさ」が負の相関をしている、他の調査結果を私は知らない。

尾上は、「近代核家族はどこまで「近代的」か？」（尾上 2014）において、ヒトの性役割分業の人類史貫通的普遍性が、現在の考古学・古人類学では、定説となりつつある、という。たとえば、二足歩行化と脳の肥大化・消化器官の縮小等による難産化・育児期間の延長が、ヒトの男をして狩りの獲物（肉）をホームベースで待つ女と子どもに分け与える性役割分業を生じせしめたというオーウェン・ラヴジョイの理説を紹介している。

どうやら、ヒトの進化史において、いわゆる何らかの程度での性役割分業はほとんど普遍的であった可能性が高そうだ。とすると、われわれは、人生のかなりを採集と育児についやしたヒトのメスたち（母たち、祖母たち、曾祖母たち、曾々祖母たち、曾々々祖母たち、曾々…々祖母たち、）の直系の子孫であることはほぼ確実だろう。

くりかえすがあくまで他の3つの変数を統制すれば、上記の現象は、このような祖先母のような生活でもそこで充実できればそれでいい、と考えている女性ほど、「生きづらさ」を感じていない、と解釈できる（逆は逆）、かもしれない。

（この祖先母は、途中で「男系」「父方」がはいてもまったくかまない。その意味で、母の母の母の……の母は、アフリカのエヴァにいきつく、といったはなしとはまったくことなる、ので、注意）。

【「過剰自己実現欲求」仮説？】

有名なマズローの欲求段階説であるが、マズローが提起したのは、文字通りあくまで、欲求段階仮説である。玩具ハノイの塔のように、下位の欲求が満たされると、ヒトは次のより上位の欲求の充足を求めるようになる。そして、その最上位には、自己実現欲求がある、というたんなる仮説にすぎない。

しかし、いまや「豊かな社会」では、先進国の国民（例えば日本人）ならだれでも、自己実現をめざすべき、とでもいうような「暗黙の空気」が存在していないだろうか。

マズローの著作自体にそのようなトーンがあることは否定しがたいと私は感じる。

しかし、だれもが「自己実現」などできるものだろうか。

いわゆる「勝ち（組）」になることは自己実現の必然的要件ではまったくない。が、生身の人間の多くは、やはり、多かれ少なかれゼロサムゲームであるような分野（勝ったり/負けたり、あるいはもっと抽象的にいって、成功したり/失敗したり、といったような分野）に自己実現をかけてしまわないだろうか。

そしてまた、他者と自分とを比較しないではいられない生身のほとんどの人は、「他人よりも成功するか/他人よりも失敗するか」に、その「実現の度合い」を賭けてしまっていないか。

その結果、自己実現ができないヒトが多く存在してしまっていないだろうか。

（註記：このこととおそらく強く関連して、現代日本のとくに若者たちにおける「広義のボランティア」がブームになっていることの原因（の少なくとも一つ）を見て取ることができるのではないか。すなわち、ボランティアなどによって他人の役に立つ、あるいは政治的イシューをめぐってデモに参加する（デモのもともとの目的はその政治的イシューを実現させることだったろう。がいうまでなく、現代の（というかこれまでも）デモは、ほとんどそのイシューの実現に失敗している。そしてこの「失敗」はかなりの場合デモ参加者にとって想定内だろう）。これは、いわば、「勝ち負け」でない投企として、ボランティア的行動が位置づけられ評価されているからではないだろうか。しかし、隣人とは「勝ち負け」がつかないとしても、どのようなボランティア的行動をするかについて、いわばヨコの他者たちとふたたび、「他人よりも〇〇できたか/その逆」という「勝ち負け」ゲームに再び頹落してしまう可能性は小さくないのではないかと私は懸念している。註記おわり）

このような「実現」困難な自己実現欲求をもった若者が「生きづらさ」を感じやすいのかもしれない。

それにたいして、自分の直系の祖先たちが嘗々とおこなってきたこと（ここでは子育て）だけでも満足できそうなヒト、そういったヒトは「生きづらさ」を感じにくいのかもかもしれない。

言うまでもなく、以上はたんなる思弁（スペキュレーション）にすぎない。本稿の段階では、「過剰自己実現欲求」仮説とでも呼んでおきたい。この仮説をエビデンスとともにテストできるようなスタディを今後設計・実行していきたい。

本稿は、女性についてのみのデータ分析の紹介であった。もちろん、男性でもまったく同様な分析はしたのだが、有意な結果はでなかった。育児以外のトピックをもふくめて、この「過剰自己実現欲求」仮説を男性でもテストするようなスタディを設計していきたい。

了

文献

Maslow, Abraham H., 上田, 吉一. 1964. *完全なる人間：魂のめざすもの*. 誠信書房.

Maslow, Abraham H., 小口, 忠彦. 1972. *人間性の心理学*. 産業能率短期大学出版部.

Nettle, Daniel, 竹内, 和世. 2009. パーソナリティを科学する : 特性 5 因子であなたがわかる. 白揚社.

尾上, 正人. 2014. “近代核家族はどこまで「近代的」か? — 一夫一婦制・性役割分業をめぐる進化論争からの示唆—.” in 第 87 回日本社会学会大会 研究報告題目・要旨.
<http://www.gakkai.ne.jp/jss/research/87/42.pdf>

謝辞

アンケート調査に回答してくださったみなさんに、感謝いたします。

本稿は、既発表論文が査読を経て修正のうえ、新たに掲載されるものである。匿名の査読者のコメントにより本文は大いに改善された。査読者ならびに関係者に深く感謝申し上げます。

註

SPSS における「変数減少法」

変数減少法. すべての変数を等式に入力してから順番に除去していく変数選択の手順。従属変数と最も小さい偏相関を持つ変数が、最初に除去する対象となります。その変数が除去するための基準を満たす場合は除去されます。最初の変数が削除されると、等式内に残っている変数のうち、最も小さい偏相関を持つ変数が次の対象となります。等式内に除去基準を満たす変数がなくなると、手順きは終了します。(SPSS のヘルプによる)